

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域で育むキャリア教育

高校3年生での2学期間の選択科目「課題探究講座」から生まれたプロジェクトが、学年や授業の枠を超え、後輩たちに引き継がれています。生徒の半数以上が世界各国からの帰国生という国際色の強い高校で、ローカルに目を向けた生徒たちはどう成長し、教員はどのように授業を創ってきたのでしょうか。高校生、卒業生、教員に語り合ってもらいました。



自己調整型の探究学習で 生徒たちが気づいた 地域に飛び出す価値

第30回 国際基督教大学高校
(東京・私立)

取材・文／江森真矢子

つていくのが最初の2カ月ほど。夏休みから2学期にかけてフィールドワークや文献調査を行い、11月には発表会、2学期の終わりに学びを振り返るといって大枠はあるが「何らかの発表をする」と以外、決まったことはありません。その時々々の生徒の声を聞いて授業を創っており、目指すのは自己調整型の探究です」と鶴飼力也先生は言う。

探究とは何か、どうやって問いをつくるのかなど、必要な事はタイミングを見て授業中の「ミニレクソン」として扱う。十数人の受講生のなかには、友人と一緒に人と人が繋がる場づくりに挑戦する生徒もいれば、文化人類学の論文執筆をする生徒もあり、進め方もそれぞれ。クラスは自分の心の音に耳を澄まし、他者とゆるやかに繋がる学びの共同体であり、教師は生徒たちを注意深く見守り、声を聞きながら個と全体に働きかける役割を担っている。

グローバルはあっても ローカルがない

そんな講座から3年前に生まれた「かけしプロジェクト」を紹介したい。目指すのは、学校近隣の三鷹市で農家

と子ども食堂、それぞれを自分たちが「助ける」のではなく、「かけ橋になる」こと。廃棄される規格外野菜などを子ども食堂に届け、子どもの居場所づくりをするプロジェクトだ。

発案者の一人、卒業生のレッドフォードさんは、2年生の終わりに学校主催のスタディツアーでエチオピアに行った経験が、このプロジェクトに繋がったと言う。レストランで食べきれない量の食事が出て、残したらどうなるのかを店の人に尋ねたところ「捨てるのではなく、スタッフに分けてそれぞれの家で食べられるということでした。以前の私は、先進国は途上国より進んでいると考えていたこともありましたが、エチオピアでのこの経験に、フードロスの多い日本が学ぶことがあると気づいたんです」。

一緒に講座に参加していた大竹さんは、「この学校にはグローバルはあるけれどローカルがない、という問題意識がありました」と言う。生徒の3分の2は海外からの帰国生で、世界的な課題について議論したり、世の中に疑問をもっていたりしても、目の前の問題解決に繋がる行動をしているのか？ 教育に関心をもっていた大竹さんがレッドフォ

ードさんと意見を交わすなかで、農家で廃棄される野菜を子ども食堂に届けるという形が徐々に見えてきた。

とはいえ、自分たちは現実を知らない。提案だけで終わるものにはしたくない、何ができるのか。教員の助言も得て、子ども食堂、近隣の農家、福祉協議会など7箇所を電話をし、直接訪ねて話を聞いた。わかっていたのは、子ども食堂の課題が人手と食材だということ、流通には乗らない野菜も大切に育てたものであること、運ぶための人手や保管場所の問題。課題を一つずつクリアして仕組みを整えた。

そして、収穫を手伝った野菜を学校に一時保管し、子ども食堂に届けることができるようになったところ、考え始めたのは、引き継ぎだった。11月に校内で行われた発表会で参加者を募り、興味をもってくれた後輩たちと子ども食堂の手伝いをしながら、次に運営を担うメンバーを探した。「卒業したら終わりでは農家さんにも子ども食堂に対しても無責任です。進学後も自分が続けた、という思いもありましたが、学校に残していく方法を考えました。新しい人や考えが入ることでプロジェクトが

「心の音の鳴る方へ」。国際基督教大学高校の課題探究講座は、3年次の1、2学期をかけて自分の興味関心に向き合い、考え、調べ、対話を繰り返す選択授業。冒頭の一文は、講座が掲げる合言葉だ。

生徒たちが車座になって自らの興味を語り合い、キーワードからテーマを絞



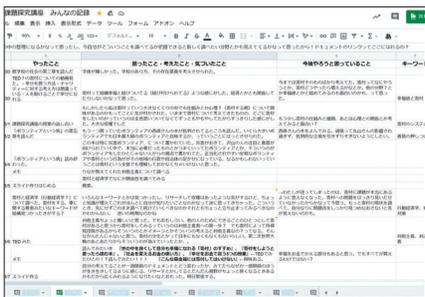
[後列左から]小倉朋珠さん(大学1年)、大竹日和奈さん(大学2年)、レドフォード望生さん(大学2年)、古屋樹人さん(大学1年)、鶴飼力也先生(課題探究講座担当)[前列左から]政野美和さん(2年)、布川理紗さん(3年)、石井 杏さん(3年)、岡安 花さん(2年)



仲間を募って子ども食堂で食事を作ったり子どもたちと遊んだりするほか、農家の手伝いにも行った。



講座では生徒が会いたい人を学校に招くプロジェクトも実施。ドラッグクイーンを招いた会は、準備から実行まで生徒が担当した。



学習履歴が残りメタ認知を促すと同時に、クラスメイトの探究の様子もわかる「みんなの記録」。互いにコメントを残すこともできる。別々の大学に通う仲間同士で「みんなの記録」を続けている卒業生もいるそう。

もつと発展することも期待して」とレドフォードさんは振り返る。

十数人の応募の中から面接を経て選ばれたのが、「食や農、子どもの貧困に興味が生まれてきたところだった」古屋さんと、「先輩たちのプレゼンに心打たれて、挑戦したいと思った」小倉さん。その後、現2年生まで4学年にわたって活動は引き継がれることになる。

「親戚に農家がいる、知っていることを生かせよう」(石井さん)、「年が離れた弟妹がいるので教育に興味があった」(岡安さん)と現役生たちの参加動機はさまざま。昨年、今年とコロナの影響で子ども食堂の開催が困難になったが、動きを止めてはいない。3年生の布川さんは「最近では農家さんとZoomで話をし、高校生に聞きたいことのアプローチをとりました」と言う。結果が戻ってきた今、現3年、2年のメンバーで何

ができるかを模索中だ。

地域に出て それぞれが学んだこと

授業から生まれ、今は有志が自主的に運営するプロジェクトに参加して、どんな気づきがあったのか。尋ねると八人様の答えが返ってきた。

地元を離れたたくて入学したという石井さんは、「ローカルが二つになって、地元のマイナス面も客観的に見て改善案を考えられるようになった」。布川さんは「地域を大切にしている人たちと初めて出会い、通学中に挨拶をしたり、家に行く回覧板を見たりするようになった。知らないところで人は助け合っているから、直接関わりがなくてもお互い気にかけるのは大事だと思う」と、居住地の見方への変化が語られる。また、「私たちの多くは駅から学校

までスクールバスで通い、お店に入るのもコンビニぐらい。周辺を歩くようになって、学校が「島」になっていることに気づいた。ほかの生徒も地域に根を張って、学校を島にしないようにしてもらいたいと思う」(石井さん)と同時に、「近所の人に、地域のことを考えている高校生もいることを知ってもらえたのは良かった」(岡安さん)という声も。

さらに、社会と自分は繋がっていて、自分たちの行動が社会を動かせるという感覚も芽生えたようだ。「テレビで見ると世の中の中の事もだいたい身近にある、ということに気づいた」と言うのは政野さん。「小さなコミュニティの集まりで世界はできていることに気づいた。小さな集まりから行動を広げていけば、大きなことも動かせる」(岡安さん)、「やってみたいことを先生に相談して、友達も反応してくれた。何かを

するときの道筋が見えて、『やりたいことはできるんじゃないか』という感覚がもてた」(大竹さん)と次々に実感を伝えてくれた。

声を聞くこと 手綱を離さないこと

課題探究講座では教員たちもまた、生徒の心の声に耳を傾け、生徒同士が心を開いて対話する環境をつくってきた。そのための仕掛けとしてクラウド上に「やったこと」「考えたこと」「これからやること」を共有する「みんなの記録」を設けている。コロナの影響でオンライン授業になったことから始めた試みだが、これがあることで教員も生徒もお互いに助言ができ、授業を組み立てる基にもなっていると鶴飼先生。

「私たちが授業でやっているのは、生徒に対してひたすら、あなたはこういう人？ あなたがここにいて意味は？と問うことです。予定調和的な成長や成果は望みません。生徒が学びの手綱を自分で握って離さないよう話を聞き、授業をチューニングする。本校は意欲的な生徒が多いですが、授業の基本はこの学校でも同じ。私はどんな学校で働くとしても、生徒の声を聞き、『あなたがあなたである意味は？』と問うと思います」と、生徒が自走し始める授業の背景にある想いを語ってくれた。

School Data

1978年創立/普通科/生徒数:747人(男子261人・女子486人) / 進路状況:大学224人・短大1人・専修0人・就職0人・その他1人(2020年度実績)